

ティーチング・ポートフォリオ

日本国際学園大学 経営情報学部 ビジネスデザイン学科
安達 万里江

教育の責任

現在（2024年度現在）の担当科目とその概略は以下のとおりである。

科目名	対象 学年	受講 人数*	授業 形態	必修 選択	科目区分 (カリキュラムにおける位置づけ)
留学生日本語A1	1	11	演習	必修	総合教養(外国語科目)
留学生日本語A2	1	11	演習	必修	総合教養(外国語科目)
留学生日本語B1	1	11	演習	必修	総合教養(外国語科目)
留学生日本語B2	1	11	演習	必修	総合教養(外国語科目)
日本語リテラシーA	1	11-18	講・演	必修	入門科目
日本語リテラシーB	1	11	講・演	必修	入門科目
レポート／メールの技術(留学生向け)	2-4	3	講・演	選択	総合教養(教養科目)

※受講人数は2024年度の登録受講人数

教育の理念

私の「教育の理念」は、以下である。

外国語／第二言語である日本語を通して他者につながり、良い人間関係を築ける人材を育成する。

私は外国語／第二言語として学生達が日本語を学べる科目を受け持っている。学生の多くは学内外の生活になじむため、また、将来、大学院進学や就職活動のための日本語学習（学修）を必要としている。そこで、可能な限り真正性のある日本語の使用場面・状況を授業で作り出すことを念頭に置き、授業デザインを行っている。そして、卒業後も社会人として日本語を通して他者につながる事が、学生達にとって実益となり、良い人間関係を築けるような人材の育成に尽力している。

教育の方法

上記「教育の理念」のための対応策として、具体例①～⑤を以下に示す。

①学習（学修）に対し、目標から評価まで自律的に向き合えるような指導

私は、教育・学習（学修）を可能な限り可視化することが重要であると考えている。学生に対し、「何を・どう教えるのか」以外にも「どう評価するのか」という説明責任（アカウントビリティ）が教員には必要であると考えている。そこで、各科目の目標がそのまま評価に結びつくような指導に努めたいと考えている。そして、長期的には、卒業後も日本語を自律的に学び続ける人材を育成したい。

②ルーブリック評価、e-ポートフォリオ評価法の採用

評価項目を可視化したり、採点に使用したりする評価ツールとして「ルーブリック」がある。また、これまでの授業で作成した成果物の過程や蓄積をファイリング（ポートフォリオ化）し、それらを実際の評価の対象とするポートフォリオ評価法がある。それらは例えば Google ドライブ等のクラウドサービス上に共有・保存していく。

③実益となるパフォーマンス課題の設定

例えば「レポート作成」「口頭発表」はもちろんのこと、「メール」「電話」「ディスカッション」等、学生たちにとって必要だと思われる、日本語を使用する場面・状況を摸したパフォーマンス課題を設定することで、言語面と社会文化面で適切な表現が使用できるよう指導したい。

④学期中の個人面談（目安：学期開始1か月後、学期末）

授業内容について肯定的・否定的な意見が出てくる頃を見計らい、個人面談を行う。特に、否定的な意見の場合は問題解決に向け、授業に対する意見について「なぜそう思うのか」説明してもらうことで、教員やクラスメートと話し合う必要性を検討する。また、その場面・状況にふさわしい相互理解が日本語でできるようにする。

⑤授業実践の言語化（記述・論文化）による成果と課題（改善点）の整理

学期中、学期後、年度後と様々だが、学術的な検証を行うことで、教育実践の改善につなげていく。

教育の成果 および 今後の目標

●教育の成果

上記「教育の理念」「教育の方法」の中でも、2018年度より授業実践・研究におけるパフォーマンス課題を「書く」の評価研究に重点を置いている。2024年度現在においては、在籍中の京都外国語大学大学院博士後期課程にて博士論文作成を目指しながら、科研費（基盤研究C）の研究課題に取り組めるまでになった。

●今後の目標

今後の短期目標としては、本学で教育実践を行うと同時に、日本の大学において、アカデミックなパフォーマンス課題としてのライティング評価に関する研究を進めていく。具体的には、第二言語としての日本語ライティング教育において、「オリジナリティのある文章の指導・評価を可能にするための評価者トレーニング」に必要な知識と技能について明らかにすることである。

長期目標としては、日本語教育関係者とともにより上記に関する理論研究と実践研究を進め、本研究課題に関心を持つ研究仲間を増やし、学術的な貢献を目指していきたい。

参考資料

個人研究ウェブサイト

「日本語ライティングの評価に関する研究」（閲覧日 2024年7月2日）